

2-III-25

急性期虚血脳におけるモノアミンの漏出—
蛍光組織化学的検索—阿波根朝光, 石川正恒, 半田 肇
(京都大学医学部脳神経外科教室)

Mongolian gerbilは、ウィリス輪の発達の悪さ故に一側総頸動脈の結紮という簡便な方法で、その30%に同側大脳半球の虚血を来たすというユニークな性質を有している。我々は先にFalck-Hillarp法を用い虚血脳における脳内モノアミンを蛍光組織化学的に検索し、生化学的には未だその減少が著明でない1時間の虚血急性期でも、尾状核などのドーパミン(DA)蛍光が著明に減少していることを報告した。今回、同様な方法で更に急性期を検索した結果、45分の虚血例で非結紮側の尾状核内の有髄線維束は無蛍光であったが、結紮側では殆んど有髄線維束として認識できない程、びまん性緑色蛍光を呈している所見を得た。この蛍光は紫外線照射や、 N_aBH_4 添加により速やかに減衰した。これはDA神経終末から漏出したDAがシナプスの範囲を越えて有髄線維束内へ拡散し、しかも虚血によりMAO活性が低下しているため代謝されにくく、又、血流が停止しているためwash-outされにくいことなどにより、有髄線維束内の蛍光として現れたものと考えられる。以上脳虚血急性期において漏出したDAを、組織化学的に、直接証明し得たので報告する。

2-IV-1

妊娠期乳腺脂肪顆粒の電顕細胞化学的観察

四方伸明, 滝上 茂, 螺良愛郎,
高丘 恵, 勝田吉重, 森井外吉
(関西医大・2病理)

機能期乳腺組織では、同一腺上皮細胞内で同時に蛋白質と脂質を産生分泌するとされているが、前者に比べて後者は電顕的に未だ十分に研究されていない。今回、妊娠依存性乳腺腫瘍を試料の芯とし、GRマウスから非腫瘍性乳腺組織を妊娠中期並びに末期で採取し、その切片にRhizopus delemarから得た純なリパーゼ(L)を用いて我々の酵素消化法を施し、機能期乳腺実質内における中性脂肪の局在を電顕的に観察した。

妊娠中期では、L消化をうけた微細な脂肪顆粒が主に核下部滑面小胞体内に認められるが、妊娠末期になると、同様の脂肪顆粒が増して核上部滑面小胞体内や拡大したゴルジ体内にまで認められるようになる。それに加えて、大小のL消化をうけたある脂肪顆粒が細胞質内に分散している。その大きなものは、先端部原形質膜直下に膜を腺腔内へ圧出するようにしてみいだされ、その周囲に微小空胞が散見される。この微小空胞内や、蛋白顆粒をいれた小胞内、粗面小胞体、糸粒体、A及びB型ウイルス粒子には、L消化産物をみいださない。また、分娩直前にはみられる、MFGMに包まれた腺腔内脂肪球にも現在のところL消化産物をみしていない。